

藤崎八幡宮  
加藤家奉納本  
八幡大菩薩御縁起  
上卷

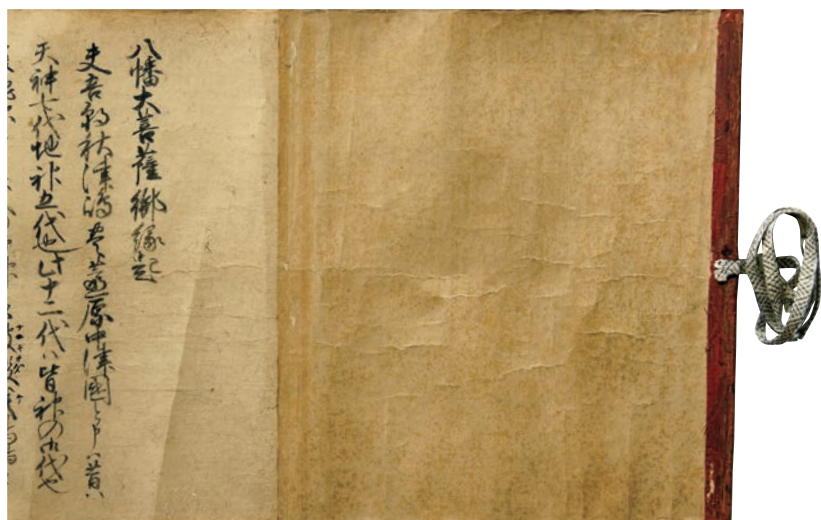
—影印、翻刻—

筒 黒

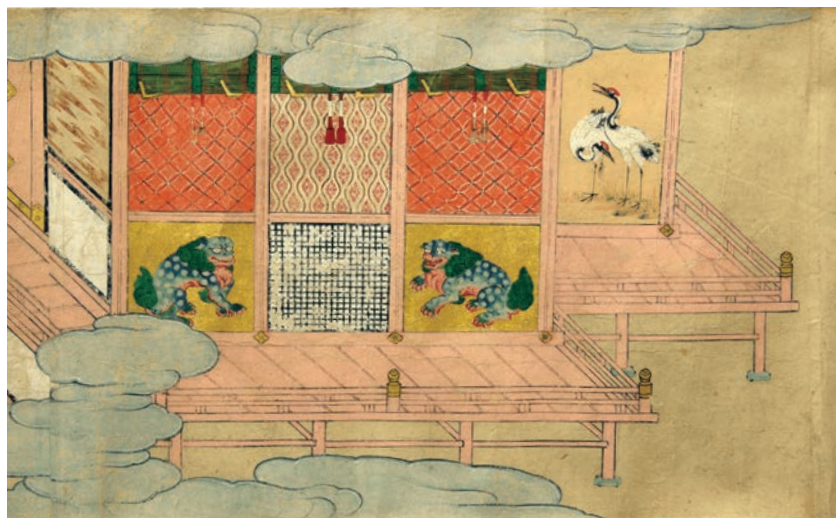
井 田

大

祐 彰





















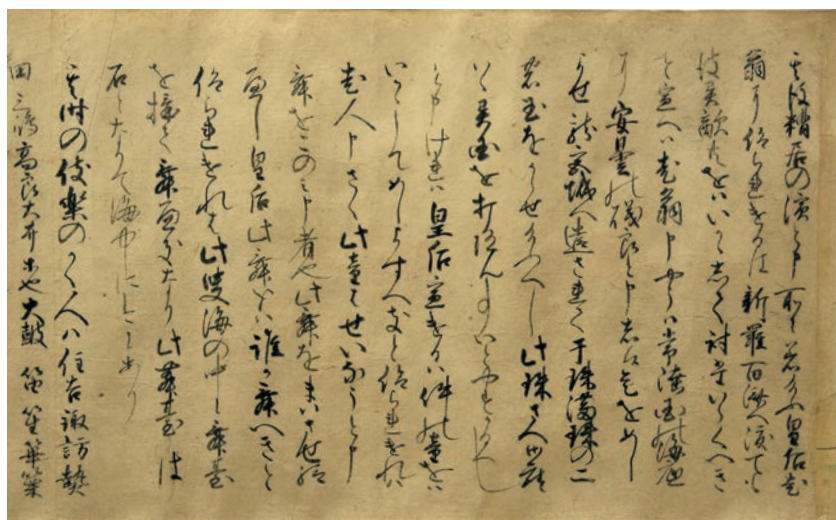


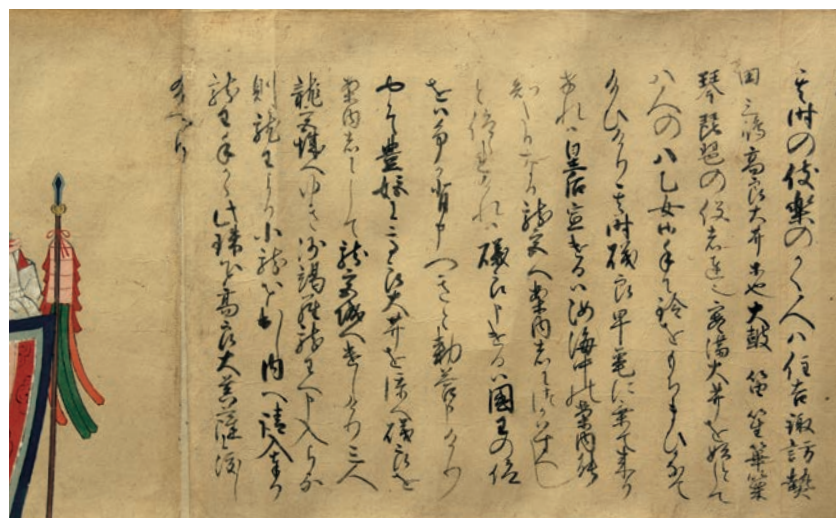


宣ひくはゆかりか援をせしきり  
 清神説より計を海に入る三つの船  
 ニッ合計くありふりかきなり入きれり  
 神祇神の二人は女まゝの髪を二  
 かくは神祇女に氣満大時神の女に  
 宗像の大時神なり  
 其後天王寺山といふ章して神祇神  
 大時と分りゆきと推し立派ひし神祇  
 二心なりしふ六日目して天王寺山といふ  
 石神となり其由流儀の事後神なり  
 くらをよりいふ山といふ天王寺山といふ  
 豊前國船木山の木を切くは依り  
 して甲子い艘の船を甲子日に生れ  
 麻のより舟より一千三百七十五  
 將軍をたをりつとて神祇の海に  
 多く佐々大時神といふは大井の別  
 將軍梶元は麻満大時神也



















目かくりやうめ新船は  
 五十艘軍兵は終に一子三百七十五人なり  
 異國の兵船十萬八千艘軍兵は四萬  
 六千余人は枝先の國に大に朝寄て  
 日本に賢吏といふ何れも女  
 を大將として敵國をこゝろんとす  
 我國の男は武藝をもちて敵敵對し  
 吾國の男はわいりくろく則は軍兵  
 聖慮のこゝき事く皇座に座を  
 大急忽ち千ありて諸地をさきう彼  
 者も皇座を打ちて恒に其  
 競うかといへる日本其の下に小競  
 あるを恒にほくらけえり









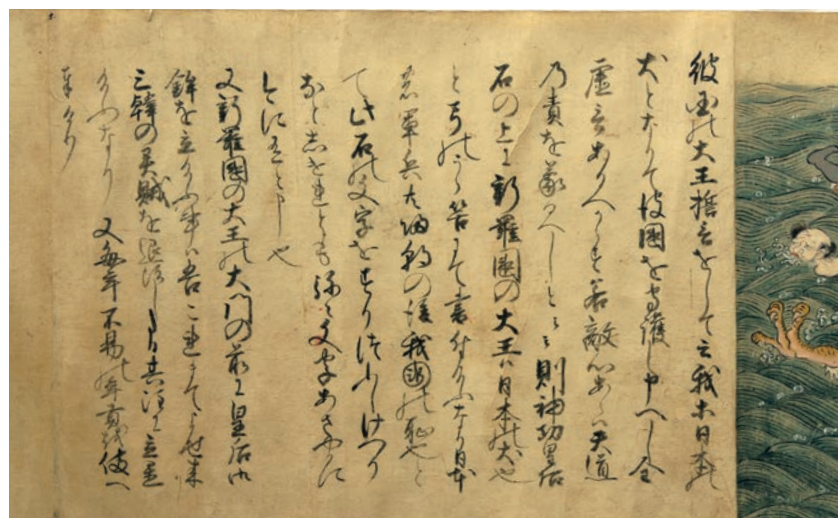


又千端をえめけ満揚を抛ちひの  
 波ふより東とふも里を海を  
 異敵軍兵い美人をさう人屋に  
 落ふより帝関潮に浸り  
 埋さぬと大臣も任取を美い妃  
 女を仍ち一十美はあ假の軍兵  
 一人に沙を死せしなり  
 或に孫を肥前国佐賀郡とゆふ  
 云ふは二の玉に納めしなり長五  
 寸計頭三寸尾に死せしなり  
 皇后異敵と打ぬゆか意を汲ひ  
 名を一天に海とあり武徳を三  
 擣しつゝ人氏をわくありと事  
 敵を兼母のれゝもねむの跡を  
 思ふ放生金とゆふ是異賊と  
 けりと事なき其例とに拘る



思ふ放生金とゆふ是異賊と  
 けりと事なき其例とに拘る  
 ありに死にたりとあり二  
 跡に任をせし死にたりと  
 ありとせし事なきなり

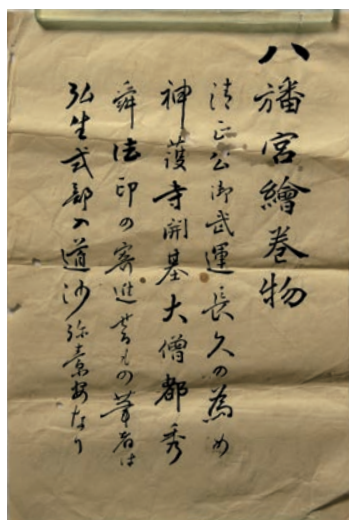














## 略 解 題

熊本県熊本市に鎮座する藤崎八幡宮は、宇佐神宮の九州五別所の一つである。

その藤崎八幡宮が所蔵する加藤家奉納八幡縁起絵巻（以下、本絵巻。）は、熊本市の有形文化財に指定されており、『新熊本市史 別編第二巻民俗・文化財』（熊本市、平成八年）に、次のように紹介される。

藤崎八幡宮は、平将門追討勅願のために承平五年（九三五、一説に承平三年ともいう）京都石清水八幡宮の分霊社として勧請された九州五別所宮の一つ。祭神は応神天皇、神功皇后、住吉大神。大永二年（一五二一）鹿子木寂心が後奈良天皇の勅額を賜り社殿を再興した際、額字に「藤崎八幡宮」とあったところから以来その文字を用いている。……本縁起絵巻は、箱書により清正の子忠広から八幡神への感謝と将来にわたる加護を祈願して神前に奉納されたことが知られる。

……筆者弘生素安については不明である。

本絵巻は、熊本県立美術館で開催された、特集展「藤崎八幡宮の歴史と名宝」（会期・平成26年7月11日～9月28日）において展示、公開された。本展覧会では、本絵巻を始め、「八幡宮」の由来である後奈良天皇揮毫の「八幡藤

崎宮」扁額や、鎌倉時代後期の木造僧形八幡神坐像、木造女神坐像とともに、狩野廣信が八幡縁起絵巻の挿絵を描いた掛幅の「八幡大菩薩縁起絵」（二幅）や細川家が同宮に奉納した八幡縁起絵巻も出展されたが、残念な事に、その社宝の全容を伝える、本展覧会の図録は制作されなかった。

この度、同宮所蔵の八幡縁起絵巻を紹介する機会に恵まれたので、本号と次号において、まずは加藤家奉納本を掲載する。本絵巻は、木箱（縦三五・三厘、横一八・二厘、高さ一三・九厘）に別紙の識語（縦三五・二厘、横二三・四厘）と共に納められている。本絵巻が納められる木箱には、表に「加藤公寄進 御巻物函」、裏に「明治十六年癸未五月日 中職人町 奉納主 本田宇三郎」とあるが、『新熊本市史』に記されるような箱書は記されない。別紙の識語には、本絵巻奥書と同様の、以下の内容が記される。

### 八幡宮絵巻物

清正公御武運長久の為め

神護寺開基大僧都秀

舜法印の寄進せるもの筆者は

弘生式部入道沙弥素安なり

次に、本絵巻の書誌的事項を記す。紙本著色上下二巻、詞書は漢字平仮名交じりで綴られている。表紙の法量は、上巻縦二九・七厘、横二六・三厘、下巻縦二九・八厘、横

二・四類。原本の法量は、上巻一六三一・三類、下巻一二三・〇類。外題は無く、内題に八幡大菩薩御縁起とある。

下巻奥書に、「慶長九年八月吉日」の年号があり、本絵巻の制作が、慶長九（一六〇四）年と知られる。なお、奥書の神護寺と秀舜について、『新熊本市史 通史編 第三巻 近世Ⅰ』『第四編 第三章 信仰と祭礼 第一節 神社の祭礼と行事』（熊本市、平成一三年）には、以下のよう

に記す。  
神護寺は現在廃寺になっているが、かつては近世期を通じて藤崎八幡宮の北側に隣接して所在した寺院で、近世期は藤崎八幡宮の祭礼・行事に必ず参加勤仕した寺院である。開基は、加藤清正が朝鮮の役の無事を祈願させるため、文禄三年（一五九四）に藤崎七堂のうちの愛染明王堂を改めて建立し、開祖として秀舜法印を招請して寺務をさせた。

本絵巻は、奥書に記されるように、加藤清正公が、朝鮮出兵の際に建立した神護寺の開祖秀舜法印が、清正公の「御武運」と加藤家の「子孫繁昌」「家門連続」を祈念するために、同寺と密接に関わっていた藤崎八幡宮に社宝として寄進したものである。なお、『新熊本市史』が述べる箱書は不明である。

さて、八幡縁起絵巻は、宮次男氏により、甲・乙二系統に分類されたが、その系統を分ける基準は、『八幡愚童訓』甲本に記される、異国からの塵輪襲来の場面の有無である。ところで、本絵巻の詞書は、『八幡愚童訓』の本文を引用して、塵輪襲来を記す乙類系統であるが、その挿絵に塵輪襲来の場面を描かない。その挿絵は、図一の御興の先導に赤鼻の面を付けた人物を描く点や、図八の戦勝の碑を書く神功皇后の下に虎を描いており、鰐鳴八幡宮本（本誌第18号）や、秋穂正八幡宮本（本誌第19号、第20号）などを始めとする、防長地方に伝わる絵巻の挿絵と共通する一方、図四の亀に乗る磯良を描く点は乙類系統の挿絵と一致する。さらに図五には、宮氏が諸本を比較して、甲と乙をつなぐ伝本と指摘された、天理本、逸翁本と同じく「豊姫竜宮行の説話」を描いている。

このように本絵巻は、その詞書と挿絵から、甲類の挿絵の展開や、乙類の詞書の展開を考察できる一例として、非常に重要な意義を有している。さらに、本絵巻の成立の背景として、加藤清正公の八幡信仰も挙げられ、本絵巻は近世期の大名家と八幡信仰を捉える上でも、貴重な伝本である。

翻刻に際しては、改行及び表記は原本通りとし、句読点は施さず、用字は通行の字体に改めた。本文中に挿絵が入

る箇所は図一以下の形で示した。

**付記** 本書の影印、翻刻をご許可下さった藤崎八幡宮に対し、心

より御礼申し上げます。

小稿は、平成29年度科学研究費基盤研究(B)による成果の一部である。



藤崎八幡宮加藤家奉納本 上巻 翻刻

八幡大菩薩御縁起

夫吾朝秋津島豊蘆原中津国と申は昔は  
天神七代地神五代也此十二代は皆神の御代也  
彼地神第五代の御神彦波<sup>ナギサダ</sup>武鸕鷀草  
葺不合尊の御子神武天皇と申は王代の  
始也彼帝より十六代の帝を応神天皇と申也  
是今の八幡大菩薩也御父は仲哀天皇御  
母は神功皇后と申す也然は彼仲哀天皇  
の御世に異国より夷来らんとて先塵<sup>サリ</sup>  
輪<sup>ハ</sup>といふ者雲に乗て虚空<sup>コウクウ</sup>をかけり  
飛来る形は鬼神のことし身の色は赤く  
頭は八ツ眼は日月のことし人民をとり  
殺<sup>コロ</sup>す事数をしらす遠く去て射んと  
すれは弓おれ矢くたけ近く寄て討  
とすれは心まとひ手足もかなはず  
人種もつき国土もあればつへしと  
みえしかは帝是をきこしめし自  
御幸なりて塵輪を退治あるへしとて  
打たち給へは神功皇后もさらは吾も

同しく罷向ふへしとて数万人の  
軍兵をめしつれ長門の豊浦の  
都へ御下向なされける中途に  
何所よりともしらぬ老翁一人出来  
れり帝いかなるものそと問せ給へは  
老人答て申さく一天の御あるし  
異国のゑひすを打したかへんと  
思召立給へは叟も御供つかまつらん  
存し参らやと申候へはやかてめし  
くして長門の豊浦へ下給ふ

図一

備後のとまりに着せ給ひし時高さ  
十丈斗の牛出来て皇后の乗せ  
給たる御舟を損さんとする時此老  
人彼牛の角を取て海の中に抛  
入給ふ仍此とまりを牛まろはしと  
書ては牛まとゝ申也此牛は島と成て  
今に海中にあり夫より皇后此老  
人を真にたのもしきものと思  
めしけり

其後文字の関より上大江か島と申泊に  
着せ給ひし時塩ことく干あかり  
船かよふへき様あらす其時も此叟彼  
舟ともを唯一人して奥へ押し  
いたしけり

## 図二

長門の国豊浦の都に着給ひしかは  
安部の高丸同介丸に勅して内裏  
の御門を警固させ給ふ或夜雲  
かきくもり風劇く吹て塵輪  
飛来しかは兩人の番衆武内の  
大臣を以て此由を奏聞申ければ  
仲哀天皇自御弓をとり矢をはけて  
能く曳て放給へは塵輪か頸の骨  
射切て身と頭と二になりて落に  
けり塵輪か死たる事は悦なれとも  
何所よりか来りけん流矢来て帝  
の御身にたちしかは玉体も御いたはり  
宝算も限とならせ給ふ御心細く思  
食ければ後の御手をととり御胸の上

に置給ひて御身懷妊にならせ給て  
はや三月になると覺る也誕生の  
子は王子なるへし異国を打順て王  
子を位につけ国土治給ふへしと宣ければ  
皇后泪を押へさせ給ひ異国の事は  
やすく退治申へし御心安おほし召すへ  
しと仰られ伏沈み給ひけり

仲哀天皇御崩御の後皇后御狂気の  
心いてき給ふ武内的大臣御簾を卷上  
いかなる御事にて御座哉と申されけ  
れは吾は五十鈴河の辺にすむ天照  
太神なり三韓の異賊既に十万八千  
艘の船をうかへ数万の軍兵ヲ従てや  
かて寄来らんとす急き異国へ向ふへし  
と宣ければ武内大臣さらは一の注を  
現し給ふへしと申されケレは光を放て  
十方を照し宣はく一の針を海に入て  
三尺の鮎食付てあかるへし髪筋を  
河に入に水神の女童神の女二人来て髪  
すちを二に分へし榊の枝に大鈴を付て  
山のみねに登て朝廷の神達を驚申へし

宣ひて御心やかて本復せさせ給けり  
御神託に任て針を海に入給へは三尺の鮎  
二ツ食付てあかる御かみを河に入ければ水  
神竜神の二人の童女参て御髪を二に  
分く此竜神女は厳島大明神水神の女は  
宗像の大明神と現し給ふ

其後四天王寺山に御幸して神木の枝に  
大鈴を付て御手に捧げ立給ひ御祈誓  
二心なかりしかは六日目に四天王来給ひて  
石体となり異国降伏の守護神なり  
給ふ是よりして此山を四天王寺山と申也  
豊前の国船木山の木を切て宇佐郡  
にて四十八艘の船を四十八日に造出し  
鹿ノ島より舟に乗り一千三百七十五人  
の軍兵共をめしつれ高麗へ渡り  
給ふ住吉大明神と高良大菩薩は副  
將軍梶取は鹿島大明神也

蘆屋浦に着給ふ時住吉大明神<sup>アジ</sup>  
弓矢を取り出し卅余丈ばかり指  
出たる岩を射とをし異国の

敵ともを射殺給ふへき首途<sup>カトテ</sup>に  
遊されけり

### 図三

其後糟居の浜と申所に着給ふ皇后老  
翁に仰られけるは新羅百濟へ渡ても  
彼異敵共はいかゝして討たいらくへき  
今宣へは老翁申やうは常陸国の海底  
に安曇の磯良と申者候是をめし  
よせ竜宮城へ遣されて干珠満珠の二  
の玉をからせ給ふへし此珠さへ御座  
は、異国を打随ん事いとやすかるへし  
と申ければ皇后宣けるは件の童をは  
いかゝしてめしやすへきと仰られければ  
老人申さく此童はせいなうと申  
舞をこのみ申者也此舞をまいさせ給  
へし皇后此舞をは誰か舞へきと  
仰られければ此叟海の中に舞台  
を構て舞へきなり此舞台は  
石となりて海中に今にあり  
其時の伎楽のかく人は住吉諏訪熱



田三島高良大菩薩等也大鼓笛笙簞  
琴琵琶の役者達也宝満大菩薩を始として  
八人の八乙女御手に鈴をもちまひかなて  
給ひけり其時磯良早亀に乗て来り  
ければ皇后宣けるは汝海中の案内能  
知たるなり竜宮へ案内者につかはすへし  
と仰られければ磯良申けるは国王の仰  
をは争か背申へきと勅答申けり  
やかて豊姫に高良大菩薩を添へ磯良を  
案内者にして竜宮城へ遣しけり三人  
竜宮城へゆき沙竭羅竜王へ申入らる  
則竜王より小竜を出し内へ請入奉り  
竜王手から此珠を高良大菩薩に渡し  
給へり

#### 図四

三人竜宮城を出て次の日の早旦に皇后  
の御舟の前に玉をもち参り給ふ皇后斜  
ならす御悦給ひやかて対馬国に押渡り  
舟より陸地に下り御鎧を脱置き白き  
石を御腰に挿給ひて吾孕奉る御子は

日本の王とならせ給ふへし今一月の間  
胎内を出させ給ふへからすと宣ければ御  
胎の内より異国御退治の終さらん内には  
生るへからす答させ給ひけり皇后悦給ひ  
やかて百済国へ渡り給ひけり

#### 図五

日本よりをしわたる船は  
四十八艘軍兵は纔に一千三百七十五人なり  
異国の兵船は十万八千艘軍兵は四十九万  
六千余人也彼国の国王大臣嘲哂して  
申さく日本は賢国也とか何とて女人  
を大将として敵国をかたふけんとする哉  
我国は男身武芸を専にす敢敵対叶  
へからすとわらひ申けり則彼国の軍兵共  
雲霞のことく責来て皇后の人衆を打  
とらんとす其時干珠を海中に抛給へは  
大海忽に干あかりて陸地となれり彼国の  
者とも皇后を打奉らんとて塩干に付て  
競かゝるといへとも日本の舟の下には小竜共  
ある故に塩に浮てより付えす

図六

又干珠を取あげ満珠を抛給ひしかは  
波みなきり来て山も里も大海と成て  
異敵軍兵は魚の食となり人屋は流て  
藻くつにましはり帝闕は潮に浮て砂に  
埋れ国王大臣も住所を失ひ彼妃官  
女も行方なし十万八千艘の軍兵共  
一人も残す死うせにけり  
或記録云肥前国佐賀郡に御座す河上の  
宮に彼二の玉は納置と覚えたり長五  
寸斗頭は二寸尾はほそき玉也<sup>云々</sup>  
皇后異敵を打順へ御本意を遂給ひしかは  
名を一天四海にあらはし武芸を三韓に  
播といへとも人民おほくころす事  
殺生の業因のかれかたし是悦の中の歎也と  
思召て放生会を行給ふ是異賊をほろ  
ぼし給ふ孝養なり其例今に懈らす  
あまりに死人おほき故に二  
竜王に仰付られて死人ともを  
くらはせさせ給ふなり

図七

彼国の大王誓言をして云我等日本の  
犬となりて彼国を守護し申へし全  
虚言あるへからす若敵心あらは天道  
の責を蒙るへしと<sup>云</sup>則神功皇后  
石の上に新羅国の大王は日本の犬也  
と弓のうら筈にて書付給ふなり日本  
の軍兵共帰朝の後我國の恥也と  
て此石の文字をすりつふしけつり  
なとしけれども彌々文字あさやかに  
今に有と申也  
又新羅国の大王の大門の前に皇后御  
鉾を立給ふ事は吾これまでよせ来  
三韓の異賊を退治したる其注に立置  
給ふなり又毎年不易の年貢を備へ  
奉けり

図八

奉図画八幡大菩薩御縁起

肥後州飽田郡藤崎八幡宮御神物  
寄附置処也 右図画意趣者

当国守護加藤肥後守豊臣朝臣清正

御武運長久之栄花開万春之花

御子孫繁昌之朗月耀千秋之空

社頭安泰而倍発神明威徳寺社

連綿而各蒙本迹擁護可

願主神護寺開基住持  
大僧都法印秀舜

画師  
弘生式部入道沙弥素安